

音楽科

異学年交流による音楽教育の研究

部 谷 友 紀

1 はじめに

小学校学習指導要領解説音楽編では、A表現の音楽づくりに関して「児童が自らの感性や創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音や音楽をつくることである。」と述べられている<sup>1)</sup>。中学年の音楽づくりの活動のねらいは、様々な発想をもって即興的に表現する能力や音を音楽に構成する能力を育てることとなっている。

本年度のこれまでの研究を振り返ると、「拍の流れにのって」の学習では、リズム2小節をつくり、拍の流れに合わせて手拍子で表現してきている。また、つくったリズムに2音を組み合わせせて旋律をつくった。

しかし、子ども達は意欲的にリズムづくりを楽しむが、音楽の構成を考えてはいない。6月には自分がつくった2小節のリズムを4名がつないで8小節の曲づくりを行った。そこでは、好きなリズムを組み合わせ、まとまりを意識して音楽を構成するには至っていない。

中学年でめざす音を発想をもって表現する力や音楽に構成する力を身に付けていくためには、モデルとなるものに出会う場、自分の考えや願い、つまり「このような音楽にしよう」という意図をもち、試行錯誤しながら工夫する場、基礎の習得をする場を設定することが必要であると考える。

そのために行いたいことが、異学年との交流による学び合いである。

本校は、幼小中の一貫教育を行っている。学習を系統的に行い、学びを深めていくことができる。また、さまざまな異学年交流を行うことができる。そのことを生かし、8年生と交流の場を設定し、8年生をモデルとすることができる。小学生がソプラノリコーダーとは違う初めて見るアルトリコーダーの音色を感じたり、話し合いから曲への思いを深めたりする活動を経験することができる。また、自分たちのリズムから、8年生が旋律をつくり、一緒に曲のイメージを考えてそれぞれのリコーダーで演奏することを通し、イメージに合う演奏の仕方を検討し合うことができる。そこから、「音」で表現したいことを構成やまとまりを工夫しながら「音楽」にすることができ、よりよいものをつくりだすことや新たなものに気づくことができる。と考える。

このように、8年生との交流を通し、曲の始まり・終わりや反復に気づき、より音楽を構成する仕組みに気づくことができると考える。本研究は、異学年交流により、音楽を構成している要素や楽器の演奏の仕方など、どのような力が身についたかを考察することを目的とする。



図1 つないで8小節の曲をつくろう

## 2 指導の実際

### (1) 単元構想

#### ① 単元名

「8年生といっしょ」

#### ② 授業実施学年

第4学年1組 40名

#### ③ 授業実施時期

10月～11月

#### ④ 題材について

8年生との交流によりイメージしたことをリズムに表し、それをもとに音を関連付け、まとまりにしていくことができる。思いや意図を2小節ずつのリズムで表し、8年生がそこから旋律をつくる活動、できた旋律を聴き、曲の始まり・終わりや反復に気づき、より音楽を構成する仕組みに気づくことができると考える。また、合同でイメージにあった強弱や速度、吹き方の工夫について話し合い、音楽全体の美しさをもとめることにつながる。



図2 できた旋律を演奏で確かめている

本単元では、研究のねらいにそって以下の2点について留意する。

#### ⑤ 指導にあたって

##### ア) 8年生との交流の仕方

8年生とイメージや表現したいことを話し合い、即興的にリズムづくりを行う。グループでいくつかのリズムを素材としてイメージを8年生に伝える。8年生が旋律にしたものを聴き、自分達のイ

メージに合っているか、また、8年生の思いや意図を理解することができるか4年生と8年生が合同で再度話し合う。その後、その曲を練習し、8年生のアルトリコーダーとの合奏では音楽の仕組みに気づくことができるようにし、まとまりのある音楽をつくることができるようにする。中学生との交流を通してより一層音や旋律の重なり of の良さに気づかせ、本題材のまとめとする。

#### イ) リコーダー演奏による工夫の場

表現の工夫をするためには、演奏の基礎ができていなければならない。演奏の基礎とは、タンギング、サミングを習得し、リズムを拍に合わせて正確に表現することができることである。その基礎ができていれば、技術を練習することよりも8年生がつくった旋律をメトロノームの拍の流れに合わせて自分たちのつくりたい曲のイメージに合う演奏法や強弱などの曲を構成する部分に着目させることができる。

#### ⑥ 目標

- リズムづくりや合同での音楽づくりの学習に進んで取り組むことができるようにする。
- 表現したいイメージに近づくために強弱や速度を考えて表現することができるようにする。
- 自分達がつくったリズムや曲をイメージに合うように演奏することができるようにする。

#### ⑦ 学習計画 (8時間)

- 第1次 イメージをふくらませて  
(合同・学年) . . . . . 2時間
- 第2次 イメージをリズムであらわそう  
(学年) . . . . . 2時間
- 第3次 いっしょに完成させよう  
(合同) . . . . . 3時間
- 第4次 発表会をしよう . . . . . 1時間

### (2) 学習の主な流れ

#### ① 8年生との交流のようす

第1次「イメージをふくらませて」での学習では、8年生と4年生でグループをつくった。4年生は、男子2名・女子2名の4人が普段から帰り

の会で一緒にリコーダーを練習することができるように生活班とメンバーを同じにした。合同授業のときには、中学生3名もしくは4名と一緒に活動をした。

その7～8名の合同グループで「春・夏・秋・冬」の中から季節を選んだ。その選んだ季節について思い浮かぶことをイメージマップに書き込んでいった。

以下、活動のようすを表す。番号は、8が8年生、4が4年生の発言を表している。

8：冬がいいと思う。どう？  
 4：雪！  
 4：雪だるま  
 8：大きなだるま？  
 4：うん。あと、スキーもいいね。  
 8：だったらスケートもあるね。  
 8：楽しい冬って感じがしてきた。  
 4：いっぱい雪がふってきて楽しい感じがいいと思う。  
 8：ああ、クリスマスもいいね。  
 T：どんな曲にしたいですか？  
 8：雪が静かに降ってくる場所もいい。  
 4：わくわくするようなクリスマスもいい。  
 8：だったら、雪合戦をしていて、最後がクリスマスっぽくなるかな？

ここでは、8年生が具体的に曲の雰囲気や速度につながるように4年生の思いを深めていることが感じられる。季節の中で思いつくことをまとめながら、少しずつ具体的にイメージを膨らませていった。しかし、グループによっては始めから偏りがあり、なかなか交流が進まないこともあった。

8：夏がいい。  
 4：どうしてですか？  
 8：楽しいから。いい？  
 4：楽しい夏にするんだね。

8：おじいちゃんが釣りしている！  
 8：頑張って釣りしとる！  
 4：なかなか釣れないんだ！  
 T：ずっと釣りから離れていないね。釣りをしているところを表現したいのですか？  
 8：そうです。  
 T：では、どうしておじいさんなのですか？  
 8：夏は季節もいいから、大好きな釣りを楽しんでいるけど、なかなか釣れない。でも、大きな大きな魚が食いついてきて・・・。  
 4：一生懸命引っ張る！  
 8：でも、釣れない！  
 4：でも、最後は大物を釣る！  
 8：成功して終わろう。  
 8：派手に大きな音がいいかな。  
 4：明るい曲がいい。

下線部のように「釣り」から離れることはなかったが、その活動はどんな様子なのかを一緒に話合う中で、どんな曲を作っていきたいのかを交流していった。

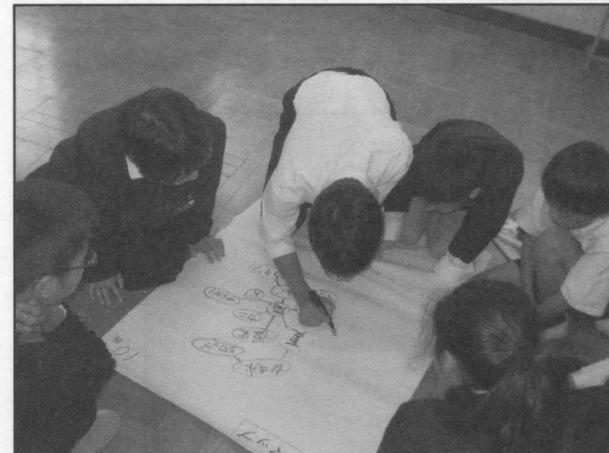


図3 合同によるイメージマップづくり

第2次「イメージをリズムであらわそう」では、イメージしたことをグループで確認し、4分の4拍子で8小節分のリズムをつくった。そのリズムを使い、8年生に曲として仕上げてもらう際、音程や速度について希望を言葉でリズム譜に書き加えた。

第3次「いっしょに完成させよう」では、8年

生がつくった旋律を実際にリコーダーで演奏して交流した。ここでは自分達がつくったリズムがどう旋律の中に生かされているのか、初めて出会った16分音符はどう演奏するのか8年生に質問している場があった。しかし、声をかけなければ、どこにリズムが生かされているのかわからず、ただ旋律ができたことに喜んでいるグループもあった。

これらのことから、リズムを見つけるなどの視点をはっきりとさせて、交流させることが大切であったと感じた。交流の中で、4年生はメトロノームを使って演奏を聴いてもらい、演奏の仕方についてアドバイスを受けた。

以下、子どものワークシートである。これらのワークシートは、子どもたちがつくったリズムや表現したいことを自分の言葉で表すことができるように作成している。

ここでは、2名のものを取り上げる。第1次合同での「イメージをふくらまそう」の学習後、まず一人ひとりがテーマを決め、4分の4拍子で2小節のリズムを考えた。

んな曲ができるのか楽しみに待っている。できた曲を一生けん命練習して一緒に演奏するのが目標だ。」と翌日の日記に書いている。

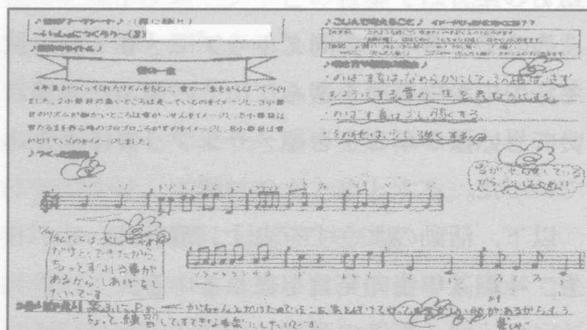


図5 A児の「完成させよう」ワークシート

このワークシートは、8年生が旋律をつけたときのものである。その旋律をリコーダーで吹き、気付いたこと・どんな工夫をしたいのか書き込みを行った。このA児は、8年生がつくった旋律に「のぼす音はなめらかにして、雪の一生をあらわすようにする」と書いている。

第3次「いっしょに完成させよう」では、曲のイメージをこのワークシートをもとに伝えることができた。

(B児) 釣りの様子をテーマにしている。

(A児) 「冬」から雪解けをテーマにしている。

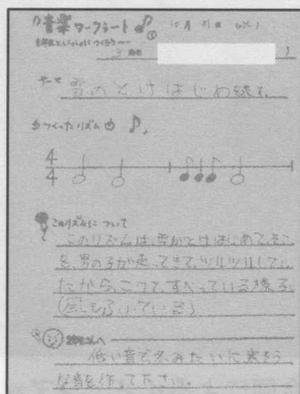


図4 A児のリズムづくりワークシート

A児は、特に表したい「雪のとけはじめ」について考え、リズムをつくった。

このリズムについて自分の思いを言葉で説明させ、発想を言語化する工夫をした。また、どんな曲にしたいのか願いを書き加えられるようにした。このA児は、「リズムを8年生に渡して、ど

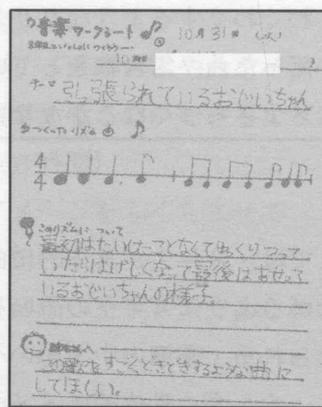


図6 B児のリズムづくりワークシート

B児は、イメージマップから特に表した「釣りの最中ひっぱられるおじいちゃん」について考え、シンコペーションで表現している。

このリズムについての説明には、どきどきするような曲にしたいと願いを書き加えている。

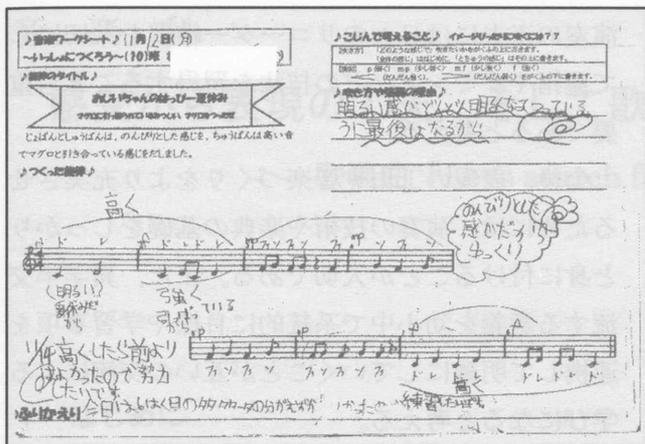


図7 B児の「完成させよう」ワークシート

このB児は、8年生の旋律から、曲の終わり方を意識し、高い音で明るい感じにすることとフォルテで盛り上げて終わることを書きこんだ。どきどきする様子、釣り上げた喜びを表現したいと記した。

単元の学習後には、ふりかえりで以下のように記した。

(B児)

- 最後の終わり方がすっきり終わらせたらいいということが分かった。マグロとおじいちゃんが引っ張り合っているとき、ドキドキしそうな音符だった。でも、速度がむずかしかったので練習した。

B児以外の子どもも音楽を構成するための要素に気づいたと思われる感想を書いた。

(C児)

- 表現は、ただ音符をならべるだけではなく、強弱も必要なんだと分かった。

(D児)

- 花が満開になっていく様子を表したかったので、8年生にお願いをした。すると、最後に花が開くように音をだんだん高く上げてありました。初めて曲の終わり方を考えた。

## ② 基礎の習得から活用へ

(習得場面)

第2次では、8年生がつくった旋律をまず

拍にあわせてリズム打ちした。一斉に一つのメトロノームで練習した。自分達がつくったリズムを見つけ、どのような音程で旋律になっているのかグループで交流した。自分達のイメージしていたものが表現できそうか考えていた。アルトリコーダーとソプラノリコーダーの音域の違いから演奏が難しいところも出てきた。また、ソプラノリコーダーでサミングなどの技法が身につけているかどうかも表現の工夫につながっていた。また、第4学年で学習する16分音符がたくさん出てきているグループもあった。どうしてこの音符を8年生は使っているのか話し合っていた。全体で16分音符について学習をした後、「このリズムは春が近づいてくるのを表しているのかな」と、つぶやいている子もあった。

この場面では、リズムを拍の流れに合わせて正確に表現することから「速さ」「曲の終わる感じ」について考えさせた。自分達の曲は、メトロノームでどのくらいの速さが合いそうか話し合った。その際、見つけた速さをワークシートに記させた。また、「速度」が決まった後は、「強弱」を考えていった。しかし、どこを盛り上げるのか考えず、大きく強弱をつけているグループが多くあった。最後の小節を盛り上げて終わるのか、静かに終わりたいのか楽譜を見て話し合った。最後低い音で終わる曲には、静かに終わりたいというグループ、たくさん音符が出てきてにぎやかに盛り上げて終わりたいというグループさまざまであった。

(活用場面)

活用とは、今までの学習で身につけた拍の流れにのって演奏することに加え、8年生から新しいリズムや曲の終わり方などを実際に演奏して確かめ、工夫に生かしていくことだと考える。強弱や終わり方を話し合った後、楽譜に赤「もっと表現したいこと」・青「強弱」を記入した。音程が高すぎて演奏すると難しいこと、低すぎて楽しい気

持ちが表現しにくいことなどを書き込んでいた。練習をして演奏ができるようになると、強弱をしっかりと考えるようになった。リコーダーであり強弱が表現できないから、「練習曲のように人数を変えていいか」など演奏の工夫にもつながっていった。

### 3 成果と課題

8年生との交流により、音が音楽になっていく過程を実感することができた。今まで、全体的に自分がつくったリズムを曲の構成とは関係なく友達とつないで曲づくりをしていたが、異学年交流をすることで、B児のように曲の終わり方に気づき、イメージ豊かに強弱やリズムを感じ取る子どもが増えてきた。また、C児のよに、つくったリズムを音としてではなく、イメージしたことを曲にするために強弱は必要であることにほとんどの子どもが気づいた。また、D児のように、まとまりを意識して終わり方を工夫した音楽づくりを感じる子どもが数名いた。

このように、自分が思いをもってつくったリズムが8年生との交流により、実際に旋律となった。リズムだけでなく、音楽の要素の「音程」「速度」「強弱」が必要であることに気づき、意欲的に活動に取り組むことができた。自分たちが経験したことのないリズムに出会い、演奏を楽しむこともできた。これらは、異学年交流の成果であると考えられる。

しかし、8年生の学び、4年生の学びが互いの交流によって高まるようにしていくためには、中学校との連携がより深く必要であった。

### 4 おわりに

本研究をして、表現の工夫をするために有効なことは、「良いモデル」との交流と「技術の習得」だと考える。異学年交流による目標となる身近なモデルからより音楽的に音づくりが音楽になっていく過程を学ぶことができる。また、音づくりや

演奏の工夫には日々のリコーダー練習を大切にしていって運指やサミングなどの技法を習得することも重要であると考えられる。

今後、表現の工夫や音楽づくりをより充実させるためには、演奏の技術や楽典の基礎をしっかりと身に付けることが大切である。また、異学年交流する意義を幼小中で系統的に目標や学習事項を連携して明確にしていくことが互いの交流による学びになると考える。

### <引用文献>

- 1) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説（音楽編）」，p. 43. 2008, 東洋館出版社.